

良い子、悪い子は家庭で決まる！

さて現代ほど“学校教育”の重要さを説く時代はないと思ひます。誰でも口を開けばその重要さを説きますが、徒らに重要だと言ふだけで、実際には何もしないのが実情です。教育は、教師や学校施設の充実よりも、各家庭が家庭教育の重大さを認識し、自らわが子のより良い生長に直接関与しようといふ姿勢の方がずっと大切なのです。

どんなに立派な学校でも、良い子もあれば悪い子もあるのが実情です。どんなに有能な教師でも、悪い子供を立派な子供に育てることは困難です。それはすでに学校に就学する以前に、それぞれの家庭の良し悪しにより、その子供の性格や能力がほぼ形成されてみて、その影響を強く受けるからです。

昭和48年、私は八王子市に教育研究所を創り、そこに幼児教室を設けました。ここでは6人の3歳児を一組にして指導するシステムでしたが、組によっては6人の間に著しい格差があつて、一斉指導に困難なものがあつました。幼児は僅か3年間の家庭教育の違いによってこれほどの格差がつくのです。私はこの格差を観て、「三つ子の魂、百まで」といふのは真理だと思ひました。このやうに3歳までの幼児の環境と教育の良し悪しは、その子のその後の一生を左右するものですか

ら非常に大切な問題です。

このやうに6人が6様で、子供の性格や能力に違いがあるのですが、それが実はその母親に生き写しである場合が多いのです。前に「学習の“学”は“まねぶ”と訓み、“真似る”ことである」と述べましたが、“真似る”ことは人間にも他の動物にも、皆生長に必要な本能として、生れながら身に備はつてみて、とりわけその親を真似せずにはゐられないからです。顔つきや体格が親に似るのは遺伝の所為ですが、話し方や立ち居ふるまひが似てゐるのは、子供が毎日朝から晩まで親の話し方や立ち居ふるまひを見聞きしてゐて、これを“真似る”からなのです。これは遺伝に因るものではありません。さういふわけで、立派な親の子供はたいてい立派であり、だめな親の子供はだめな場合が多いのです。それで、「蛙の子は蛙」と言はれてゐるわけです。